

大日本聾啞実業社と小樽聾啞授産場

戦前における私立札幌聾話学校の職業教育と施設設置の背景を巡って

中根 伸一

日本聾史学会会員 札幌聾史研究会会員 北海道社会福祉史研究会会員

1、はじめに

戦前、道内の聾啞学校における職業教育や集団的な就職対策、とりわけ就労に関する施設はすべて札幌聾話学校と深い関わりのあるものばかりであった。それらは終戦を前にして解散されている。現在も引き継がれているろうあ者授産施設は、田中皎一先生（1923～2000）が興したわかふじ寮（新得町・昭和28年設立）の1ヶ所のみである。

戦前、札幌聾話学校の職業教育と集団就労施設の必要性から生まれた授産施設は、当時の北海道においては他に類をみないものであったことは確かである。

しかし、それらの事業は、途中で挫折し、露となって消え去っていったものが多い。田中皎一先生が興したわかふじ寮の場合は、札幌聾話学校と直接的な関係はないが、彼はかつて、ろうあ者の職業教育と自力更正の必要性を唱えた近藤兼市校長に師事した同校教師であった。

この他、道内には途中から身体障害者全般の授産施設になった所や、収容施設に変わったいくつかの施設が存在しているが、これらは研究対象から省くことにする。

以下は、戦前、札幌聾話学校が興したろうあ者に関する施設を列記する。

イ、昭和6年6月

札幌聾話学校内に別棟の職業授産施設「大日本聾啞実業社」を設立する

ロ、昭和13年10月?

札幌聾話学校の元教師水戸クニエが小樽育成院内に「小樽聾啞授産場」を設ける。

ハ、昭和16年11月

釧路の塘路湖畔に農業開墾を主体とした「聾啞職業研究所」を設ける。

二、昭和18年11月

十勝御影（みかげ）村に同じく「北海道聾啞農志塾」を建設する。

以上の4施設は、戦前のろうあ者就労施設に関して把握できたものである。これらの設置背景と事業内容を分析し、当時のろうあ者の置かれた実態を調査して、明らかにすることがこのレポートの主たる目的である。

2、近藤兼市校長の職業教育観

大正14年7月、北海吃音矯正学院内に聾啞部を設置した近藤兼市校長は、昭和6年、札幌聾話学校と改称するとともに、敷地内に「大日本聾啞実業社」（以下、聾啞実業社と略する）を設立した。当時の記録では、代表に深宮友仁を置き、指導員7名、実習生約20名で、職業種目は、理髪部、印刷部、製本部、木工部、ゴム印章部、洋裁部、和裁部に分かれていた。それらの職業部には、卒業生の就労者が配置され、聾話学校の生徒たちは午後からの授業として指導を受け、自分の希望する職業科の実習を行なう形を取っていた。いわば、生徒の職業教育と実習をも兼ねた授産施設であった。

近藤兼市校長は、ろうあ者の職業教育について、一見識をもっており、「聾口話教育」第9号に投稿した内容には、そのきっかけと職業教育の必要性が次のように述べている。

「一般聾啞者を観るに、家庭に、学校に、将又社会生活に、社会人として進む上に遺憾に堪へざる状態を呈し、進んで其の原因等を考慮した結果、それは聾啞教育と實生活との関係について、其の指導施設の欠くる所ある結果なることを知った。

聾教育は故に普通教育と実業教育乃至その実業的施設と連結せねばならぬといふ考えを起し、かくて社会の實生活と密接なる連絡を行はれるものであるといふ結論に到達し、この方針のもとに実業部（印刷、和服裁縫）を設け、聾者をして智識の修得と共に其の技術の練磨に努めしめ、一般社会人に接せしめた・・・」

北海道の戦前におけるろうあ者の就職に関する統計や資料が存在していないので、比較検討することができないが、聾唖実業社内に設けた職業教育の職種内容は、当時としては考えうる限りの就労可能性を考慮したものであろう。中には革新的と思われる職種もあり、職業教育に対する近藤兼市校長の意気込みの大きさが測り知れよう。

3、深宮友仁先生の就任

聾唖実業社代表に就任した深宮友仁は、大正14年、北海タイムス社（現在の北海道新聞社）取締役の藤本静良に懇願されて、職業教育の印刷指導に当たった人であった。藤本静良には聾唖の娘がおり、将来、「親亡き後、自活するために手に職を与えたい」という願いと説得に心を打たれたと思われる。

当時の北海吃音矯正学院は、豊川稲荷境内の建物を間借りしていた。その建物の一隅の石炭小屋を改造して印刷実習室を設け、依頼を受けた深宮友仁は、名刺印刷機や一式の部品を取り揃えた。しかし、募集した指導員が現れず、仕方なく自ら生徒たちのために本業のかたわら夜間指導を行なった。

3ヵ月後にその出来映えの評判が広まり、近所からの依頼が大量に舞い込むようになった。責任が伴う印刷受注であるため、おじが経営していた深宮活字製造所を退職してろうあ者の職業教育に身を投じた。深宮友仁の記録によるとおじや周囲の反対を押し切った退職であったという。当初の生徒は5人で助手は1人であった。

北海吃音矯正学院は、昭和2年、市内にあった札幌盲学校と合併して「札幌盲唖学校」となり、さらに昭和6年には、新校舎を造築して札幌聾話学校と改称し、盲部を分離して札幌盲学校と改称し、同じ校舎内に併置する形で発展した。

それに伴って、新校舎の敷地内に「大日本聾唖実業社」の社屋を建て、印刷部を含む各種職業科目を拡張した。当時としては、東日本においては最も充実したろうあ者授産施設であると報道された。

4、身売りした「大日本聾唖実業社」

ろうあ者の自力更正を目指して始まったこの授産事業は、スタートした時点からは順風万帆ではなかった。

校舎が完成したその年、建築資材を斡旋した小樽の臼井請負師への代金支払いが滞ってしまい、後援会役員の財産を差し押さえると訴えが出された。さらに後援会の役員に連なる人々、北海道議会議長や札幌市議会議員、

前述の北海タイムス取締役滝本静良、近藤兼市校長及び深宮友仁代表ら7人が訴えられるという大騒動が巻き起こった。

聾唖実業社の指導員たちが次々と離職するようになり、その影響で、指導員を補充する志願者が集まらなくなってしまった。

次第に学校運営費や食料代、石炭代などが事を欠くようになり、しまいには聾唖実業社の売上金まで手をつけたため、受注の資材購入の資金の底をつくような状態になった。さらにまた、給与未払いによる教員たちのストライキ事件が起こり、借金取立ての人々が押し寄せるといった事態になっていった。そうした経過があつて、聾唖実業社の事業は次第に困難になって行った。

昭和10年ごろ、聾唖実業社に隣接する傷痍軍人収容の家屋が焼失し、収容者たちは一時避難所として聾唖実業社の2階南側の広い部屋をあてがわれた。（近藤修の証言）そうするうちに聾唖実業社は、傷痍軍人の代用収容施設を兼ねるようになり、その傷痍軍人たちに印刷などの職業訓練を行なうようになった。そうした経過と相まって、昭和13年、国の傷痍軍人に対する厚生事業（職業指導、就職斡旋及び職業再教育の実施）の政策化（産業報国のひとつ）に苦慮していた北海道庁が、渡りに船とばかりに、聾唖実業社の買収に乗り出した。

一方、資金繰りに苦しんでいた聾唖実業社も、国策に反対出来ず、傷痍軍人の再教育の場として建物を北海道庁に売却し、大型輪転機などの設備はすべて無償で譲渡した。傷痍軍人の職業訓練は当時の社団法人北海道社会事業協会付属の厚生社が受託し、1年後の昭和14年5月から「傷痍軍人職業訓練所・軍人遺家族職業補導所」としてスタートした。聾唖実業社代表であった深宮友仁氏が厚生社の主事に就任した。

借金事件の騒動と戦時体制の産業報国の国策、そして、傷痍軍人の代用収容施設化などの不運が重なって、結果的に、「軒先貸して母屋を取られる」のこわさを地で行ったように、ろうあ者の社会復帰の唯一の道が途絶え、露となって消え去った。ろうあ者の職業教育の必要性を力説した近藤兼市校長の苦汁を呑む心境を推察出来るよう。

売却するまでの12年間は短い期間とは言え、昭和12年まで卒業した134人の中、家業を受け継いだ生徒を除いて、ほとんどはここで学んだ職種で自活した人が多くいた。

特に、戦前のその時代にろうあ者雇用開拓と基盤を築いたという見地から、聾唖実業社の果たした役割と功績

は非常に大きかったとみることが出来る。

5、小樽聾唖授産場と水戸クニエ先生

聾唖実業社の閉鎖に伴って退職した教員、洋裁部の指導員を兼ねていた水戸クニエ先生は、昭和13年、小樽にある精神障害者収容施設の「小樽育成院」内の一部の建物を借りて「小樽聾唖授産場」をスタートし、所長に就任した。その詳しい設置年月日や経営内容に関する資料の所在を小樽育成院の歴史を研究している人に求めたが、聾唖授産場の存在すら初耳だというように資料が散逸していて不明である。

幸い、水戸クニエ先生が、「北海道社会事業」第90号（昭和14年11月発行）に投稿した「聾唖者と授産」にはその事業の概要があり、深宮友仁の自伝記とあわせて残された数少ない記録であった。

この授産場の位置づけは下記のように記述している。「社会の産業戦線の延長であるこの授産場で沈黙の産業戦士として活動している彼らの姿こそ聾唖の授産場の意味と使命をはっきり物語っている・・・」

収容した対象者については、「ここに集まってきました者は、当市及び各地聾唖学校を卒業したが年は取って就職が出来ず困った者・家庭が貧困で教育を受けられぬという人が村長さんの証明書を携えてきた者、他家へ見習いにやられたが、ひがんでしまった者、頭が悪いため、成績が伸びず聾唖学校を追い出された者など、12名を入れ、授産、養育、補導部に分けて、生活を指導しつつ技術を授けております」

主な作業内容は「陸軍の軍需品で、第1回の納入から事故がなく、被服廠の検査を通過し、技術と能率に対して時の〇〇准尉からおほめの言葉をいただき・・・」いわゆる陸軍から委託された縫製作業が中心の授産施設であることがこの文章で明らかになっている。

さらに文中、水戸クニエ先生自身の授産場についての考え方がしたためである。

いわく「聾唖者に対する社会施設、発達しなかったのは与論の起こらぬことが勿論ではありますが・・・中央における教育に携わる人の頭があまり理想主義に走って普通の人の中に彼等を入れ、これと伍して行かせることのみを考へたり、また、授産場の如くヶ所に聾唖者を集めることは即ち罪悪であるかのような考へを持っている人が有った為であります・・・」

非常に厳しい中央批判である。誰を指しているかは判断がつかないが、おそらくろうあ者のそれぞれの能力に

応じた教育でなく、手話を排除し、画一的な純口話主義を唱える人々を指しているかと思われる節がある。水戸クニエ先生が在職していた時は、口話教育普及のために名古屋へ派遣された教師であったことを付け加える。

その聾唖授産所に収容した中には、閉鎖した洋裁部にいた時の教え子を何人か引き連れられたと思われるが、生存者からはっきりとした証言は得られなかった。

昭和18年に授産場が閉鎖され、一部の収容者たちは、「東京ネクタイ」授産所へ派遣した。東京ネクタイ授産施設は以前から、深宮友仁とつながりがある授産施設であったが、戦局がいよいよ激しくなり、空襲による被害が出て、東京が危険になった翌年に閉鎖した。札幌に逃げ帰ったろうあ者のひとり、札幌聾話学校の寮母に採用され、定年退職まで、変遷した「みかげ学園」（元北海道聾唖農志塾）で勤めあげた人であった。

水戸クニエ先生は、のちに同僚だった深宮友仁（聾唖実業社代表）と結婚した。

終戦直後の札幌には札幌聾話学校が十勝御影村へ移転し、そのままに留まっていたために、ろうあ者に対する教育が空白となった。昭和21年、札幌市内の聾児を持つ親たちの懇願により、深宮夫妻が自宅の8畳間を開放して「ろう聾深宮塾」を設けて8人の聾児に教育を受けた人でもあったが、夫婦共、病身であったため、わずか2年で閉鎖した。

6、塘路（とうろ）湖畔の聾唖職業研究所の実態

札幌聾話学校の卒業生に対する社会復帰訓練が、傷痍軍人保護のために道庁に売却したことから、その道が閉ざされてしまったが、「園芸部」だけは継続した。

昭和12年発行の札幌聾話学校要覧によれば、札幌と近接する恵庭村宇島松（現在の恵庭市）に農地45万坪持っていたと書かれてあるが、実際に開墾したという記録が残されていない、仔細は不明である。

昭和16年、園芸部から農芸部を設けると共に、札幌市から遠く離れた釧路市近郊の塘路湖畔にある家屋と土地を借りて、「塘路聾唖職業研究所」を設けた。

その年、現地へ派遣した札幌聾話学校の生徒は15、6人で、担当は教員の佐藤繁善であった。

要覧に示されている恵庭村の広大な農地を持っていないが、わざわざ、塘路湖畔まで行って開墾したことになるが、そのころはすでに何かの事情で手放したのではあろう。

塘路湖畔に設けた施設は、ろうあ者の職業を研究する

ことであったが、どんなことを研究したか、その形跡が残っていない。むしろ、食糧生産の農作業と開墾が主な実体で「研究機関」の名に値しなかったかもしれない。しかし、わざわざ「職業研究所」という看板を掲げたこと自体は、当時のろうあ者に対する就労開拓の大きな課題が抱えて模索したことを物語っている。

後日、聞き取り調査した記録によれば「開墾や野菜づくりを実習させたが、霧の多い土地柄に加えて、荒地、それに不慣れが重なって、思うような成果が得られなかったようであった」という。

7、十勝御影（みかげ）村で北海道聾唖農志塾の建設

昭和18年、塘路湖畔の聾唖職業研究所は、農地開墾の失敗による撤収と新たな開墾地を求めて、十勝御影村（現在の清水町御影）へ移転した。

清水町が発行した町史には、「収容施設120坪、教育施設80坪、聾唖学校の卒業生で、身寄りがなく、就職困難で、しかも家庭的事情のある者30名収容し、職業指導の再訓練を行なった」と記述されている。

翌年（昭和19年）、札幌聾唖学校から先発隊として6名の生徒が十勝御影村へ出発した。

故人らの回顧録によれば、この事業は塘路から引き揚げたろうあ者たちのアフターケアとろうあ者の楽土（楽園）建設というスローガンのもとで行なわれたという。

さらに最後の後発隊として、終戦の直前の昭和20年7月5日、札幌聾唖学校と札幌盲学校の生徒や教師たち、総勢217名を引き連れて十勝御影村へ集団疎開した。札幌聾唖学校の全校舎を国鉄札幌管理局に売却した上、片道切符で大移動を敢行した。「学校疎開」は札幌市長の勧告で行なわれたという証言が残されている。しかし、実体は「学校疎開」でなく「学校移転」という方が当たっている。

十勝御影村には、卒業生で構成する北海道聾唖農志塾集団と、在校生集団の2集団が、存在したわけになるが、両方共、ほとんど自給自足の生活が強いられ、学業なしの農作業や一般農家への援農作業に明け暮れていた。

終戦後、十勝御影から札幌に逃げ帰った人々の話を総合すると、楽土建設の夢にも似つかわしくなく、人間らしい生活すら出来なかった状態であった。また、逃げたろうあ者の一人が列車に轢かれて死亡する事件が起こり、収容した多くのろうあ者たちが栄養失調状態になったという悲惨な証言もある。

残された生徒たちは、昭和23年に義務教育化したおか

げで、「北海道立御影聾学校」に格上げされて収容したが、札幌の親元へ戻る生徒が続出して、生徒数が減少したために、わずか2ヵ年で近くの北海道帯広聾学校に吸収されて閉鎖した。一方、残った収容者たちの聾唖農志塾は「みかげ学園」に変わり、現在は知的障害者収容施設の「つつじヶ丘学園」（帯広市）に合併し継続している。

8、それらの背景とその後

冒頭の4施設建設の試みは、近藤兼市校長の唱えるろうあ者の自力更生の道を確保し、その援護に尽くしたいという願いの延長線上からもたらされたものであった。しかし、それらの試みは、ことごとく打ち破られ、悲運な結末を迎えた。そのことは誰よりも一番に心を痛めたのは、他ならぬ近藤兼市校長自身であったろう。

近藤兼市校長がなくなれる前に心情を吐露した言葉がある。「社会事業は人の善意だけでどうも支えられない。少なくとも社会事業家は資産家でなければならない。本来、社会事業は国家でやるべきである」述べていた。塗炭の苦しみを味わった者でないとうてい口に出せない言葉であったかもしれない。

当時の社会背景は、ろうあ者に対する理解が著しく低く、そのために社会事業を志す人たちの舐められた辛酸は並大抵なことではなかったことと、さらに加えて、我が国が支那事変から始まった長期間の戦争状態に突入したため、国内のすべては、軍事優先の国策が敷かれた時期と重なっていた。そのため、ろうあ者の就労援護問題すら後回しにされ、ないがしろにされた事は当然の成り行きであった。こうした時期にろうあ者の就労施設を設けて、真剣に取り組んだことは、不運であったとしか言いようがない。

小樽聾唖授産場の場合は、戦時体制による就労施設として設けられたものであった。こうした例は道内では珍しく、唯一の施設であったが、途中から受注先の軍需品減少によって短期間で閉鎖されてしまった。ろうあ者就労援護問題が根本的に解決したとは言えないものであった。

しかし、近藤兼市校長が示した先覚的な職業教育の指針は、当時としてはろうあ者が生きる上での最低限の手段として高く評価出来るものがあつた。また、この指針に共鳴して、それぞれの施設を設けた元教員たちの活動は、多くの制約を受けた中では、同じように高く評価できる。

時代は「ささやかな願い」さえも許されない冷酷な現

実があった。そうした当時のやむを得ない事情があったとは言え、いのように振り回されたろうあ者たちは、一番の大きな被害者であったと言える。その被害者たちはその後、どのようにして生きて行ったのか。残された記録から、その後の推移を若干付け加える。

北海道庁に移管した傷痍軍人職業訓練施設は、昭和17年、別団体である「軍人保護院奉公財団北海道作業所」に渡され、引き続き傷痍軍人の職業指導を行った。この時に不要となったミシン台や散髪椅子などは個人や愛国婦人隣保館に寄付された。

幸い、聾啞実業社の旧職員であった人が、戦後いち早く輪転機などを回収して「八紘社」を興した。散り散りになった聾啞実業社のろうあ者印刷部員たちが再び結集した。それらの集団が、後世の社団法人札幌聴力障害者協会の前身となる「札幌聾啞交友倶楽部」の結成に繋がり、現在の札幌におけるろうあ者の権利擁護運動の強固なる一大拠点に発展した。

9、終わりに

時代の荒波に翻弄されたろうあ者集団の就労施設やその実態は、他県の古い記録からいくつか散見できる。北海道の例のような終戦を境にして路傍に追いやられたところも少なからずあつただろうと推察できる。それらの実態が掘り起こされ、記録されることは、大切ではないかとの調査に臨んだ一人として強く思った。

それなくしては、戦時中のろうあ者に置かれていた全体の抑圧的な実態を把握し得ないだろうと思う。ましてや口述による記録保存や文章で残すことの出来ないろうあ古老たちが非常に多い中、貴重な資料になるだろう。

その人たちの逝去と記憶の薄れ、資料の散逸、消滅は、時間に比例して加速されている現実を知るべきであろう。

「自分史」運動が流行っている昨今、古老の「手話語り」をビデオ化し、また、文章に翻訳する作業の活動が急がれている。日本聾史学会の会員皆さん、一日も早く地元での掘り起こし運動に参加することを心からお願いして、私のレポート報告を終える。

この調査に当たって、関係者からの参考文献やご助言、ご教示によって助けられた部分が多くあったことをここに記し、改めてお礼申し上げる。

〈 参考文献 〉

- 深宮友仁 「わが夢 50 年の歩み」
「風雪 50 年あの時あの人」
私立札幌聾話学校同窓会
「我が母校の夢 60 年史・歩み」
札幌同志会刊行 「青空通信第 3 号」「青空通信第 4 号」
佐藤忠道 「札幌市におけるろう教育のあけぼの」
「近藤兼市先生年譜」
札幌市社会事業協会著 「札幌市社会事業のおいたち」
北海道社会事業会刊行 「北海道社会事業」 通刊号
日本聾啞協会刊行 「聾啞界」 通刊号
日本聾啞教育福祉協会刊行 「聾啞の光」 通刊号
「聾口話教育」 第 9 巻
社団法人札幌聴力障害者協会刊行
創立 50 周年記念誌「拓魂（たくこん）」
札幌聾史研究会刊行
「北海道聾史研究」シリーズ 1 号～7 号
故近藤兼市先生 33 回法要記念写真集
社会法人小樽育成院創立 100 周年記念誌
「永遠（とわ）に」